

活断層学会 2013 年度秋季学術大会報告

日本活断層学会 2013 年度秋季学術大会を、2013 年 11 月 29～30 日に茨城県つくば市のつくば国際会議場（エポカルつくば）中ホール 200 で開催した。参加者は会員 95 名（うち学生会員 2 名）、非会員 50 名の、計 145 名であった。初日の 29 日には一般研究発表の口頭発表とポスターセッションのコアタイムを設け、夕刻からは懇親会を開催した。翌 30 日には一般研究発表の残りの口頭発表と各賞受賞表彰式、午後からは「活断層とは何かーその本質とリスク」と題したシンポジウムを行った。

一般研究発表

一般研究発表の口頭発表は、29 日の午後と 30 日の午前に分けて行われた。ポスターセッションのコアタイムには 29 日の 16 時 30 分から 1 時間が割り振られた。発表数は口頭発表が 13 件、ポスター発表も 13 件であった。発表数はやや少なめであったが、若手からベテラン研究者までが互いの発表を通じて議論し合う姿が見受けられた。ポスターセッションのコアタイムは 1 時間と短かったが、ポスター会場が口頭会場の入口ホワイエであったことから、コアタイム以外でもポスターの前で議論をする姿が目立った。ただ、ポスター会場の照明が上部にしかなく、人垣ができるとポスター下部が暗くて見づらくなるという問題点があった。なお、ポスター会場では、「2013 年日本の活断層・フォトコンテスト」の入賞作品および応募作品が展示され、多くの人で賑わっていた。

シンポジウム

大会 2 日目となる 11 月 30 日の午後 1 時 30 分から、「活断層とは何かーその本質とリスク」と題したシンポジウムが開催された。このシンポジウムの趣旨は、昨今、活断層の有無やその認定方法などが大きな社会問題となっている中で、活断層とは何かという基本的な問題について、単に活動時期による定義だけでなく、その規模や対象とする深さといったスケール感、地震動や地表のずれなど活断層がもたらすリスクを正しく認識することを目的に、理学・工学の両面から議論を行うことにある。

趣旨説明に引き続き、熊木洋太会員による「地形・地質学における「活断層」の認識」、松澤 暢会員による「活断層で発生する地震の「固有性」について」、藤原広行会員による「活断層情報は地震ハザード評価にどこまで活かせるか」、鈴木康弘会員による「活断層の位置情報の「精度」に関する留意点」、岡本敏郎会員による「活断層の位置や形態が建設部門に与える例と段差対策の今後」の 5 件の講演が行われ、最後に全員が壇上に登っての総合討論でシンポジウムを締めくくった。総合討論では、活断層の活動の固有性や、空間・時間的なスケールとその精度などについての問題が取り上げられ、会場からの質問も交え、活発な議論が交わされた。

懇親会

29日の18時から、会場1階のレストラン エスポワールで懇親会が開催された。懇親会には約50名の参加があった。中田 高会長からの開会の挨拶の後、開催地を代表して産業技術総合研究所活断層・地震研究センターの岡村行信センター長による乾杯で、宴が始められた。途中、論文賞受賞者の紹介やフォトコンテスト入賞作品の紹介が行われ、最後には、次回2014年度大会の開催地に内定している東北大学の遠田晋次会員より日程や会場についての紹介があった。会場には地元茨城の地酒が用意され、情報交換や交流の場として大いに盛り上がった。

各賞受賞表彰式

17日午前の口頭発表終了後に各賞の受賞表彰式が行われた。今回は学会賞は該当者なしであった。論文賞は、木村治夫・中西利典・丸山 正・安藤亮輔・堀川晴央の5氏による「糸魚川－静岡構造線活断層系神城断層における地中レーダー探査」(活断層研究第38号, P. 1-16)に贈られた。若手優秀講演賞は、三田村圭祐・奥平敬元・三田村宗樹の3氏による「生駒断層帯に沿って産する断層露頭における断層ガウジ」に贈られた。またフォトコンテストの受賞者も表彰された(詳細は別稿参照)。

今回の大会は、交通がやや不便なつくばでの開催ということから、どの程度の方に参加していただけたか不安であったが、結果的には例年並みの参加者に参加していただけた。また一般向けのシンポジウムを行わなかったにもかかわらず、50名の非会員の方に参加していただけたことは予想外であった。

最後に、本大会の設営・運営にご尽力いただいた学会事務局・アルバイト諸氏をはじめ、関係の皆様には厚く御礼申し上げます。